

化政文化—文芸と美術

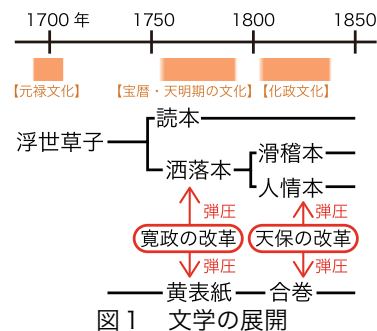
化政文化の小説には多くの作品形態があり、その区別はいかにも繁雑である。これは、作者が時の流行・制約を考慮しながら形態を変え、同時にその特徴を十分に活用して独自の文学を創った証拠である。また絵画は、江戸時代後期の退廃的印象とは全くの無縁で、清新な美的活動があった。これら絵画は後に西洋を魅了した。

○文学

●小説

19世紀初め、小説は次の4様式に分かれていた。

- ①⁽¹⁾ _____ …庶民生活の滑稽を会話中心に絵入りで描いた小説
 ②⁽²⁾ _____ …庶民の恋愛情痴を絵入りで描いた小説
 ③⁽³⁾ _____ …歴史・伝説を文章主体で描いた小説
 ④^{こうかん}合巻…黄表紙の流行・内容膨張に合わせ、数冊分を綴じた小説群
 ⇒⁽⁴⁾ _____ で、(2)の代表的作家⁽⁵⁾ _____ や
 合巻の代表的作家⁽⁶⁾ _____ が処罰された。



<滑稽本>

- (7) _____ …代表作は湯屋を舞台にした『^{ゆや}(8) _____』
 (9) _____ …代表作は江戸っ子2人の旅行記『⁽¹⁰⁾ _____』



図2 『浮世風呂』

<人情本>

- (11) _____ …代表作は女性の愛欲生活を描く『⁽¹²⁾ _____』

<読本>

- (13) _____ …代表作は怪談『⁽¹⁴⁾ _____』
 (15) _____ …代表作は里見家再興の伝奇『⁽¹⁶⁾ _____』



図3 『東海道中膝栗毛』

<合巻>

- (17) _____ …代表作は室町時代の大奥を描く『⁽¹⁸⁾ _____』

●俳諧

^{しなの}信濃の百姓⁽¹⁹⁾ _____ が村々に生きる人々の生活などを詠んだ。

⇒代表作として、1年間の雑感をまとめた俳書『⁽²⁰⁾ _____』が有名である。

●和歌と狂歌

香川^{かげき}景樹が起こした古今調の優雅で平明な歌風^{けいえん}桂園派は、あまり浸透しなかった。

⇒その他、越後の禅僧^{りょうかん}良寛が生活歌を詠み、わずかに活躍しただけであった。



図4 小林一茶

和歌よりも、滑稽味を取り入れた短歌⁽²¹⁾ _____ が盛んに詠まれた。

⇒⁽²²⁾ _____ (蜀山人) は、滑稽味のなかに風刺も込めた(21)を詠んだ。



図5 『北越雪譜』

●その他

(23) _____ が、雪国の自然や生活を紹介する『⁽²⁴⁾ _____』を著した。

○美術

●浮世絵

18世紀末～19世紀初め、各地に名所が生まれ、人々の旅行が一般化した。

⇒多色刷浮世絵版画⁽²⁵⁾の風景画が流行した。

<代表的な浮世絵師と浮世絵>

⁽²⁶⁾…代表作は東海道と甲州から富士山を眺めた『⁽²⁷⁾』

⁽²⁸⁾…代表作は東海道の各宿場の風景・風俗を描く『⁽²⁹⁾』

歌川国芳…代表作は、浅草の張りぼて人形を描く『朝比奈小人嶋遊』



図6 『富嶽三十六景』



旅人を強引に泊める
旅籠の女性「留女」



図7 『東海道五十三次』の「御油」



図8 『朝比奈小人嶋遊』



図9 『柳鷺群禽図屏風』

●写生画

呉春（松村月溪）は、文人画の長所を^{まるやま}円山派に加味して、

日本趣味豊かで写実性に富む四条派を開いた。

⇒代表作として、『柳鷺群禽図屏風』が有名である。

●文人画

豊後の田能村竹田、江戸の^{ぶんぶん}谷文晁、女性江馬細香が文人画家として活躍した。

→谷文晁の門人^{かざん}渡辺華山の活躍で文人画は全盛期を迎えた。

⇒渡辺華山の代表作として、『鷹見泉石像』が有名である。



図10 『鷹見泉石像』

ジャポニスム—歌川広重とゴッホ

19世紀後半、フランスを中心に日本美術に対する関心が高まっていた。これをジャポニスムという。1886年、パリに出たオランダ人画家ゴッホも、印象派の明るい色彩に出会うとともに、浮世絵に強く惹かれ、模写を試みた。油彩によって実践された右図の模写は、原画より一層明るさと光沢を増している。四周に様々な浮世絵から切り取った漢字を書き加えることで、装飾性も加えている。

